

講演

パフォーマンスアート研究におけるデジタルテクノロジーの役割

内田まほろ

この数年の間にパフォーマンスアートの世界にもずいぶんメディアテクノロジーの変化が起きている。世界各国の美術館、博物館、研究所では、急速なアーカイヴのデジタル化が行われている。さまざまな芸術の中でも、その時、その場限りの瞬間芸術であるパフォーマンスアートはアーカイヴが難しい分野のひとつであったが、デジタル技術のおかげで逆に最も冒険的な分野になりつつあるのも事実である。ここでは、パフォーマンスアートとデジタル技術の未来に心を巡らせながら、まずデジタル技術とアーカイヴ関係について簡単に考察し、具体的に慶応義塾大学アートセンターの土方巽アーカイヴの例を紹介したい。

アーカイヴとデジタル技術

アーカイヴとはある特定のテーマに関係する資料を収集、保存、研究し、そして公開することを指す。デジタル・アーカイヴというと、デジタル画像や映像のみを集めてアーカイヴと称したものも少なくないが、ここでは、オリジナル資料のアーカイヴ方法の一つにデジタル技術を取り入れたものと定義し話を進めていきたい。アーカイヴにおけるデジタル技術は、特別な曖昧模糊とした何かではなく、新聞の切抜きをスクラップして見やすくする、写真に日付を書いて整理することと、同様にアーカイヴ方法、手段のひとつである。しかしながら、この技術は従来では考えられなかったさまざまなアーカイヴの機能、すなわち資料の収集、保存、研究を実現する可能性を持ち、多くの新しい研究方法を提案してくれるが、様々な危険性もはらんでいる。その技術を生かすには、逆にオリジナル資料の綿密な研究、分析をし、デジタル技術によって何が出来るのかを理解し、どのようにその技術を取り入れていくか徹底して吟味する必要がある。アーカイヴのデジタル化は、単に資料をデジタルデータに置き換えるということ以上に、扱う資料の性質を知るという行為であり、資料研究そのものである。なぜならデジタル・アーカイヴはオリジナル資料の扱いを助けると同時に、全く別のデジタル資料を新たに作り出す行為だからである。

デジタル技術が可能にすること：

資料のデジタル化は、物理的には、ある資料の

ある側面を0, 1の文字列、デジタル情報に置き換えるということである。0, 1の文字列に置き換わるということは、一体どういうことなのだろうか。

まず、物質から開放され、完全なコピーが可能だという側面から考えてみよう。例えば、数百ページの大型図書の各ページを画像データとして、さらに印字された文字はすべて文字データとしてデジタル化したとしよう。デジタル・データは物質的な本という形態を持たないため、破れたり、水分を含んで痛むこともない。また重い本を運ぶ必要もない。一度、本をデジタル・データ化してしまうと、我々はその物理的な制約から解放されることになる。物理的に資料の複製を作る場合、回数を重ねればその質は落ちていく。誰でも、コピーを重ねて読めなくなってしまった新聞や、本の厚さで影になり端の文字が読みにくくなってしまった資料を手にした経験があるだろう。しかし、デジタル・データであれば、我々は何度資料をコピーしてもオリジナルと全く同じの質の複製を作ることが出来る。また、物理的な制約を持たず、いくらでもコピーできるデジタルデータは、混ぜたり、壊したりするのも簡単である。例えば、Aというダンサーの写真に、同じポーズのBやCやDというダンサーの写真を重ねる、右を向いているダンサーの画像を反転させて左を向かせるなど、従来の研究にはなかった明確な比較研究が行えるだろう。衣装の色を変える、背景が邪魔なら切り取ってしまうなど、実物の写真を使っては到底出来ない研究が、デジタル資料によって可能になる。資料の必要な部分だけを抽出し、他の資料と混ぜ合わせる、つまり新しい自分だけの研究資料を作り出すことが出来るのである。文科系の学問、特に美術や芸術学などの比較研究が中心の学問においては、一つの資料がさまざまな比較に対応するのは喜ばしいことだろう。

デジタル・データはデータベースの技術と組み合わせると、更にその威力を発揮する。図書館でダンスと演劇と劇場の建築的な側面について書かれた本があったとしよう。もしこの本がこの図書館に一冊しかなかったとすると、この本は図書館の整理法に従って、ダンスか演劇か建築の棚のどこかに置かれることになる。この本に書かれた3つの側面は、ひとつの場所に置かれることによって失われてしまい、本棚を見ながら本を探す人が

この本に巡り会う可能性は3分の1になってしまふ。しかし、この本の内容がデジタル化されるとすれば、どこの分野から調べたとしてもこの本に必ずたどりつける。アーカイヴの分野でデジタル化することの最大のメリットは、多様な検索機能が可能だという側面である。アーカイヴをデザインする上では、検索機能をいかに工夫するかが肝になっていると言っても過言ではない。

非物質、複製、検索という性質に加え、デジタル・データはネットワーク技術によって一箇所でしか出来なかつた作業、一人でしか閲覧できなかつた資料を複数の人と共有することを可能にする。遠隔地の人と同じ資料を同時に共有することが出来るのである。貴重な資料が多く閉鎖的な傾向が強いアーカイヴが共同作業の場として機能し、多方面の研究を同時に行うことを可能にするのである。デジタル化によって可能になった共同作業の場としてのアーカイヴについて、慶應義塾大学アートセンター、土方異アーカイヴの例を用いて説明したい。

舞台空間としてのアーカイヴ(土方異アーカイヴ)

筆者は数年前から、舞踏家故土方異氏のアーカイヴに関わることになった。舞踏はもとより、パフォーマンスアートの門外漢だった筆者は、多くの舞踏関係の資料にふれ、パフォーマンスアートの専門家達との議論を重ねるうちに、ふと舞台とアーカイヴにはある共通の概念があることに気がついた。それは、アーカイヴの語源、ラテン語のアルケイオン(公会堂のような建築物)が示しているように、アーカイヴもパフォーマンスの舞台も、観るものと観られるものが存在する「空間」だという事実だ。この考え方は、その後のアーカイヴ設計コンセプトを確固たるものにし、現在ではアートセンターのアーカイヴ全体の重要な柱となっている。舞台の出し物を企画、運営、制作する舞台でいうところのプロデューサーの立場から、土方アーカイヴを簡単に説明したい。

アーカイヴの役者：

アーカイヴの役者とは、言うまでもなくアーカイヴの資料群だ。我々が委託を受けた資料の形態は、非常に多岐にわたっている。文字資料としては、土方の著書、土方についての著書、そして土方が所有していた書籍がある。雑誌記事、新聞記事などは、舞踏評論の資料として利用価値が高い。また、土方が多く残した、草稿や手紙なども文字資料としてあげられる。アーカイヴが表面的にもっとも図書館と異なるのは、扱う資料が書籍に限らない点である。土方アーカイヴには、文字資料以外に、音、画像、そして映像の資料がある。インタビューを中心とした土方自身の声が録音さ

れたテープ、また、公演で使用された舞台音楽などが音の資料にあたる。数千点に及ぶ舞台写真、そして、チラシやチケット、ポスターなどの一過性資料=エフェメラ資料も、著名な写真家、美術家とのコラボレーションが多いため、美術的な価値の高いものも多い。また、チラシは各公演の詳細データが記載されていることから、文字資料としても貴重な情報をもっている。また、土方自身の制作による舞踏譜とよばれるアイデア・スクラップブック、あるいは弟子に踊りを伝えるための、スクラップブックが17冊委託されている。これには、当時影響を受けた絵画の切り抜きや、イメージがスケッチブックにスクラップされ、そこに体の動きやイメージを伝える、走り書きが添えられており、土方研究者にとっては興味のつきない資料である。最近では土方のもとで学んだ弟子自身による舞踏譜の委託もはじまったため、アーカイヴに加わる舞踏譜は少しずつ増えてくる予定である。数はそれほど多くはないが、舞台映像、出演した映画などの映像資料もある。文字、音、画像、映像というように便宜上4項目にわけて書いたが、映像の中に音があることもあれば、画像の中に文字があることもある。これらの異なった形態の資料を扱うにはそれぞれの資料を形、大きさのそろった形態別に資料を並べて保存しなければならないが、デジタル資料は、すべて0、1の文字列として一つのハードディスクに入れておくことが出来る。

アーカイヴの観客：

我々は利用者とともに資料を共有し研究していく場所そのものがアーカイヴであるという考え方から、あえてアーカイヴの利用者を「参加者」という呼び方をしている。アーカイヴの観客はいうまでもなくアーカイヴの参加者だ。土方異アーカイヴにおける参加者は、主に舞踏の研究者である。それに加え、土方の活動が文学者、美術家たちとの親密なコラボレーションから成り立っていたこともあるために、参加者にはその分野の研究者たちも含まれる。そして、当時の社会背景を視野に含めた社会学者、そして日本特有の土着的な身体表現という観点から研究をする文化人類学者たちも、このアーカイヴの観客として考えられる。そして、現在舞踏研究は、日本国内よりも、海外でのほうが盛んであることから、多くの観客は外国の研究者である。

アーカイヴの脚本：

いかにおもしろく、興味深く資料を提示するか。その鍵を握るのは、資料の関係性の抽出にある。ひとつの資料に多くの関係性を作り出し、あらゆる角度から資料にアクセスできる、つまり魅力的

なシナリオを持ったアーカイブは、研究者に多くの発見をもたらすものとなりえるだろう。土方巽アーカイブでは舞踊研究者や図書館関係者と何度も議論をかわしながら、検索キーワードとなる各資料を関係付ける概念を設定し、検索方法などの設計を進めている。土方の研究においては、資料の形態からの検索以外にも、土方舞踏そのもの、時代、場所、人、コミュニティ、テキスト、他の芸術分野との関係が各資料にタグとして記載され、各資料の複雑な関係が浮かびあがるような仕掛けを試みている。例えば、一枚の写真には撮影者、撮影年月日などの基本項目以外に公演名や被写体など、わかる限りの情報を加える。すると一枚の写真は関係する公演やダンサーなどさまざまな資料への窓口となり得るわけだ。すなわち、アーカイブの参加者はさまざまな資料の見方が出来るわけである。また検索用のデータはすべてデジタル化されているので、一度定めた解釈が違うのではないかという意見があれば、それを随時アーカイブに反映させていけばよい。

アーカイブの演出：

アーカイブにおいて舞台演出にあたるのが、インターフェース（操作性）デザインである。インターフェースの開発で重要なのは、研究者が現実の世界で、何を目的として、どのように資料を扱うのかを、洗い出し言語化し、それをコンピューター上の限定された画面で再現することにある。さらに、現実世界では実現するのが困難な行為、あるいは「こんなことができたらいいなあ」という希望を、コンピューター上で実現できるかどうか検討することである。例えば、土方アーカイブには、芸術家の研究をする者にとっては非常に便利な時間軸インターフェースという機能がある。これは、土方の活動時期をカレンダーとして常に表示し、検索中のすべての資料が土方の活動の時期と照らし合わせ一目でわかるようにしたものだ。さらに、このカレンダーの年号に操作のためのポインターを近づけると、その年の中心的な活動が、短いテキストで示されるようになっていく。このアーカイブでは、どのような資料も、土方の年譜と同時に参照できるようになっているわけだ。この機能を作るきっかけは、芸術家のアーカイブにおいて、資料を時間軸上に並べることの重要性を知り、それをどのようにコンピューター上で表現するか悩んでいたときに、舞踊研究者から年譜を常に参照したいという希望があったことからだった。このように、インターフェースは参加者が利用し、意見することにより、機能をより理想的な形に変えていくのである。ちなみに、土方の場合その主な活動が当時の時代背景と密接に関わっているので、年譜以外に社会的な出来事も加える方

向で現在資料作りを見直している。

共同作業の場としてのデジタル・アーカイブ

以上、土方アーカイブがどのような舞台を提供しているかを簡単に説明したが、共同作業空間はアーカイブに参加者が加わることによって完成する。上述したように土方アーカイブは常に資料が更新されていくことを前提に設計されているが、その更新はアートセンターのアーカイビストだけでなく、実際にアーカイブを利用する参加者たちにもゆだねられている。そして、多くの参加者の利用によって、資料の事実項目を増やし、資料間の新しい関係性を抽出し、新しい研究の視点を充実させたいと考えている。そのため、参加者がコメントを残していけるシステムや、参加者の資料検索の履歴を残すシステムを開発している。また、インターネット上での利用を予定し、なるべく多くの人に参加してもらえるように著作権などの処理を急いでいる。

時間、空間芸術という、テキストでは記述しきれない分野であるにも関わらず、いまだ論文が中心であるパフォーマンスアートの研究方法も、デジタル技術の普及、研究環境が整うことにより、随分変わってくるだろう。そしてその変化は、従来、映像や音が扱いにくかったことで様々な制約のあったパフォーマンスアートの分野においては、驚くほど大きなものに違いない。研究分野全体に、デジタル技術が浸透したとき、デジタルアーカイブが本当の意味で、参加者とともに多数の研究者と議論する場を提供し、知を共有する場としてのアーカイブ、公会堂としてのアーカイブを可能にするのだろう。デジタル技術がもたらす共同作業の場が、研究の場、創造の場にも広がっていくことを期待したい。